

〔実践研究〕

特別支援学校に在籍する子供を対象とした
アダプテッド・スポーツの実践的検討
～重度・重複障害児の「活動の場」としての有効性～

加地 信幸¹・相川 貴裕²・河野 喬¹

**A practical examination of adapted sports for children in special needs
education school: Effectiveness as a “place of activity” for children
with in profound and multiple disabilities**

Nobuyuki KAJI, Takahiro AIKAWA, Takashi KAWANO

Abstract

Special needs education has been a part of the School Education Law since 2007. According to the guidelines under this section of the law, all schools are required to enhance support for children with disabilities. In this study, we report on the exercise and sports practices introduced as a result of implementing measures against COVID-19 infection for children with profound and multiple disabilities in special needs education school, and also assess this as a “place of activity” for participating children. We examine the effectiveness of. Results reveal that for the participating children who have profound and multiple disabilities, “a place for communication,” “a place for extraordinary activities,” “a place for dynamic exercise/sports,” and “a place for expressing a pleasant reaction” were “activities.” It is suggested that it is effective as a “field.”

Keywords

Children with profound and multiple disabilities (重度・重複障害児), Adapted sports (アダプテッド・スポーツ), Special needs education (特別支援教育), Medical care (医療的ケア)

I. はじめに

**1. 特別支援教育を受けている重度・重複障害児
の現状**

特別支援教育とは、2005（平成17）年12月、「特別支援教育を推進するための在り方について（答申）」において「障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するとい

う視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、それに対応した適切な指導及び支援を行うものである」と示されている。この答申に基づき、2007（平成19）年4月、「特別支援教育の推進について（通知）」において、特別支援教育が法的に位置付けられた改正学校教育法が施行されるに当たり、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校におい

¹ 広島文化学園大学 (Hiroshima Bunka Gakuen University)

² 朝日医療専門学校広島校 (Asahi Medical college of Hiroshima)

て行う特別支援教育について、基本的な考え方、留意事項等がまとめて示された。

2020（令和2）年度現在、我が国で特別支援教育を受けている幼児児童生徒の在籍者数は144,823人で、前年度より389人増加し、過去最多であったことが報告されている（令和2年度学校基本調査）。本研究で対象とした特別支援学校に在籍する子供とは、重症心身障害に準じた重度・重複障害を有し、中には吸引、酸素吸入、経管栄養などの医療的ケアを必要としている医療的ケア児も含まれる。重症心身障害児は、重度の知的障害と重度の肢体不自由が重複した18歳未満の障害児と定義されている（児童福祉法第7条の2）。なお、重症心身障害児者の人口は、2012（平成24）年時点ではおよそ43,000人と推計され（岡田, 2001）、家族とともに在宅で生活する重症心身障害児（者）が増加している（名里, 2011；岡田, 2001）。また、小沢ら（2017）の推計によれば、全国の重症心身障害児者数は、47,030人と報告したうえで、我が国の医療の進歩により今までは救命できなかった疾患が救命できるようになり、その数も増加傾向にあることに言及している。このように、医療の進歩により医療的ケアの必要な重症心身障害児の生命予後は長くなり、在宅で過ごすことが増している。そして、特別支援学校に通ったり、在宅で訪問教育を受けたりするといった特別支援教育を受ける医療的ケアの必要な重度・重複障害児の在籍者数は増加している。

2. 特別支援教育を受けている重度・重複障害児の運動・スポーツの重要性

2007（平成19）年4月から学校教育法に「特別支援教育」が位置づけられ、すべての学校において、障害のある幼児児童生徒の支援がさらに充実している（田中ら, 2019）。しかし、特別支援学校などでは、個々の実態に応じて成長や発達を促す教育が取り組まれているものの、学校以外の地域で定期的に参加できる運動・スポーツ活動の取り組みは充実しているとは言いきれない。運動・スポーツは子供の成長や発達を促す有用な手段で

あり、医療的ケア児を含む重度・重複障害児にとってもその手段になり得る可能性がある（加地, 2021）。特に、多くの重度・重複障害児の通う場は学校や病院に限られるため、同年代との遊びや交流の場の不足、および成長・発達への影響などが懸念される。文部科学省（2013）によれば、「特別支援学校における体育の授業以外におけるスポーツの機会」では、運動会などへの参加が90.2%、地域で開催される障害者スポーツ大会などへの参加が56.6%と、校内や郊外におけるスポーツ大会等の参加機会は高い割合を示している。しかし、「地域住民とのスポーツを通じた交流」は11%、「その他の地域での活動など」は5.9%と、地域住民とのスポーツ交流や地域活動の機会は低い割合を示している。障害の有無に関わらず全ての子供達にとって運動・スポーツは成長や発達を促す有効な手段になり得る可能性があり、学校のみならず地域において定期的に参加できる運動・スポーツ活動の場の充実が求められている。

3. 重度・重複障害児を対象としたアダプテッド・スポーツ教室の取り組み

重度・重複障害児の運動・スポーツ活動の場を充実させるためには、アダプテッド・スポーツの考え方が役に立つ。アダプテッド・スポーツとは、対象者の身体面を配慮して、ルールや用具を適合させることによって、誰もが参加できるスポーツとして定義づけられた概念である（矢部, 1997; Winnick et al. 2016）。筆頭筆者は、医療的ケア児を含めた重度・重複障害児を対象とした、HBG 重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」（以下、「はなまるキッズ」）を2007年に設立し、地域で活動できる取り組みとして「アダプテッド・スポーツ教室」を毎月一回のペースで実施を継続している（加地, 2018）。「はなまるキッズ」実践とは「子供にとって地域でいろいろな人と関わり合いながら主体的に楽しんでスポーツ活動に参加できる」、「支援者にとっていろいろな人と楽しく関わりながら実践的に学べる研修の場としての役割を果たしている」といった点が有効で

あったことを報告（加地，2021）している。

2020年度より「はなまるキッズ」は、広島市立広島特別支援学校の協力を得て、「令和2年度市立特別支援学校児童生徒の地域活動推進事業」としての取り組みとなった。主な実施場所も従来の広島市心身障害者福祉センターの体育館から、広島市立広島特別支援学校の体育館に変更した。しかし、14年目を迎えた2020年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、2020年2月、3月、4月と3回の活動中止を余儀なくされた。これまで経験したことの無い状況下の中、対面によらない三密を避けた活動の実施について、関係する専門家、支援者、保護者等と検討した結果、2020年5月以降はオンラインによる運動実施や感染対策を講じた屋内外での新たな活動を計画し、計14回実施した（表-1）。なお、7月は支援者のみで2020年度から新たに使用する会場となった広島市立広島特別支援学校・体育館の感染対策や備品の使用・管理、指導方法などを検討した。

本研究では、2020年度に「はなまるキッズ」が特別支援学校に在籍する重度・重複障害児を対象に、新型コロナウイルス感染症対策を講じて実施した新たな運動・スポーツ実践について報告し、参加している子供の「活動の場」としての有効性について検討する。

Ⅱ. 「はなまるキッズ」のアダプテッド・スポーツ実践

1. オンライン運動

「はなまるキッズ」を設立して以来、初めてとなるコロナ禍に対応したオンラインによるウェブ会議ツールを活用した運動・スポーツ実施を計4回実施した。ここでは実施した運動のうち、初回の実践を報告する。実施したのは2020年5月30日（土）、9：30からおよそ30分であった。実施場所は、筆頭筆者の玄関先スペースからオンラインでつながった各家庭の部屋であった。参加したのは、子供と保護者が5組（10名）、子供の保護者が1名、特別支援学校教諭や療育園保育士などのボランティア支援者が3名であった。

実施した内容は、①呼びかけ歌体操「おはよう」（写真-1）、②スローベンチ椅子・ラジオ体操（写真-2・3）、③呼びかけ歌体操「さよなら」の3つの運動であった。①～③については、日頃の対面による「はなまるキッズ」実施プログラムの内容と同様とした。

①③呼びかけ歌体操では、はじめに「おはよう」、おわりには「さよなら」と呼びかけ歌による上肢の運動を実施した。キーボードによる伴奏の途中でストップさせた際に、上肢を2回ほど筆頭筆者

表-1 2020年度「はなまるキッズ」参加者

	日にち	場所	子供	一般	学生	合計	延べ人数
1	4月27日	コロナ禍の影響により中止	0	0	0	0	0
2	5月25日	オンライン（自宅）	6	4	0	10	10
3	6月22日	オンライン（自宅）	3	4	0	7	17
4	7月11日	広島市心身障害者福祉センター・プール	13	14	0	27	44
5	7月25日	広島市立広島特別支援学校・体育館	0	6	0	6	50
6	8月22日	広島市立広島特別支援学校・体育館	9	8	2	19	69
7	9月26日	広島市立広島特別支援学校・体育館	8	7	4	19	88
8	10月25日	広島中央河岸公園・元安川周辺	8	10	0	18	106
9	10月31日	広島市立広島特別支援学校・体育館	8	10	2	20	126
10	11月8日	広島中央河岸公園・元安川周辺	8	10	4	22	148
11	12月26日	オンライン（自宅）	7	4	1	12	160
12	1月11日	オンライン（自宅）	5	4	1	10	170
13	2月29日	広島市立広島特別支援学校・体育館	8	10	3	21	191
14	3月28日	広島市立広島特別支援学校・体育館	13	11	8	32	223

がカメラに向かって差し出した手のひらに向かって、各自宅のモニターを介して手を挙げて伸ばす運動を実施した。

②スローベンチ椅子・ラジオ体操では、特製のベンチ椅子に子供と指導者が共に座り、前に座る子供が後方の支援者より必要な支援を受けながら、ゆっくりとしたラジオ体操の曲に合わせて上肢の上下運動や体幹の回旋運動などを実施した。モニターを介して上肢の動きなどが分かりやすいモデルとして、長時間のパソコン作業を楽にすることを目的に開発された姿勢補助用クッション(写真-2)を使用した。このクッションは、適度な硬さの芯があり、寄り掛かってもつぶれずにしっかり体を支えることができる。また、キーボード作業時のアームレスト用に2本の腕があり、この腕で上肢の動きなどを表現しやすいことから体操時のモデルとして使用を試みた。



呼びかけ歌体操 (写真-1)



スローベンチ椅子・ラジオ体操 (写真-2)



スローベンチ椅子・ラジオ体操 (写真-3)

2. プール運動

一般社団法人日本スイミングクラブ協会(2020)は、「スイミングクラブにおける新型コロナウイルス感染拡大予防のためのガイドライン」において、プール環境が安全な環境であることについて、「消毒の徹底、3密環境対応等、感染防止対策は非常にしっかりとされている」「プール環境の湿度や次亜塩素酸ナトリウムによる殺菌消毒の徹底した管理によって、プール施設内は感染防止に優れた環境である」と解説している。これらのことから、7月よりプールでの活動を再開することとした。

これまででもプール運動は、広島市心身障害者福祉センターのプールにおいて毎年7月、8月に定期的実施してきた。ここでは7月の実践を報告する。実施したのは2020年7月11日(土)、10:00から12:00であった。参加したのは、子供が13名、特別支援学校教諭や療育園保育士などのボランティア支援者が14名であった。

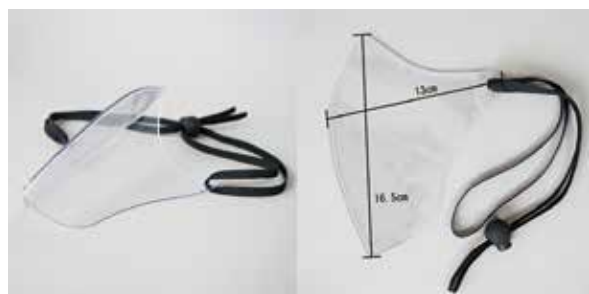
実施したプール運動は、①エアレックスマットを活用した背浮き泳ぎ、②支援者のサポートによる背浮き泳ぎ、③支援者のサポートによる平泳ぎ(写真-4)の3つの運動であった。



支援者のサポートによる平泳ぎ (写真-4)

実施に当たっては、事前の参加基準チェックシートによる参加の可否判断、当日の子供への活動前後の①体調等の聞き取り、②非接触型体温計による検温、③パルスオキシメーターによるSpO₂と脈拍の測定を実施した。また、保護者、支援者、

学生に対しても、事前・事後に①体調等の聞き取り、②非接触型体温計による検温を実施した。実際の活動については、三密を避けるため3部に分けて1回あたりの活動時間は20分とし、子供の人気は最大5名と少なくした。子供に接する支援者は、1名の子供に対して複数に関わることの無いように1名に関わるよう制限した。また、更衣室が最も密になりやすいため、プールサイドにマットやタオルなどで囲んだ更衣スペースを設置し、更衣室での混雑を避けるよう工夫した。子供達は事前に水着着用のうえで集合し、プールサイドで衣服やおむつなどを脱衣後、すぐに入水できるようにした。プール内での支援、および更衣室やプールサイドでの着替え介助時には、使用する器具のこまめな消毒を徹底しながら、支援者全員がフェイスシールド、プール活動専用の透明マスク（写真-5）を着用し、飛沫感染予防に努めた。



プール活動専用の透明マスク（写真-5）
（出典：株式会社Rockin'Pool）

3. 体育館での運動

体育館での活動については、2020年2月からコロナ禍の影響により実施を見送っていたが、8月から新しい会場である広島市立広島特別支援学校の体育館において再開し、計6回実施した。ここでは8月の実践を報告する。実施したのは2020年8月22日（土）、9：00から12：00であった。参加したのは、子供が9名、特別支援学校教諭や療育園保育士などのボランティア支援者が8名、学生が2名であった。

実施した体育館での運動は、①呼びかけ歌体操「おはよう」、②スローベンチ椅子・ラジオ体操、③スクーターボード運動（写真-6）、④トラン

ポリン運動、⑤マットローラー運動、⑥呼びかけ歌体操「さよなら」の6つの運動であった。

実施に当たっては、プール運動実施時と同様に、事前の参加基準チェックシートによる参加の可否判断、当日の子供への活動前後の①体調等の聞き取り、②非接触型体温計による検温、③パルスオキシメーターによるSpO₂と脈拍の測定を実施した。また、保護者、支援者、学生に対しても、事前・事後に①体調等の聞き取り、②非接触型体温計による検温を実施した。活動は三密を避けるため3部に分けて1回あたりの活動時間は20分とし、子供の人気は最大5名と少なくした。子供に接する支援者は、1名の子供に対して複数に関わることの無いように1名に関わるよう制限した。実際の活動中は、支援者全員がフェイスシールド、マスクを着用し、ゴム手袋も使用した。また、保護者が子供に直接触れて支援する形を徹底し、ボランティア支援者と学生は保護者をサポートする形を取った。消毒スプレーを手に持った専属の消毒係としての支援者と学生も配置し、使用前後の用具消毒やボランティアへの手指消毒に回るようにした。1回の活動終了時には、ソーシャルディスタンスを保ちつつ10分間の会場換気と消毒時間の設定に加え、休息と水分補給時間の確保等、新型コロナウイルス感染症対策と熱中症予防対策に



スクーターボードでブロックを倒す子供（写真-6）

についても万全にしたうえで、全員が楽しく安全に活動できるように実施した。

4. スタンドアップ・パドルボード（サップ）運動

「はなまるキッズ」を設立して以来、屋外での運動・スポーツ実施については初めての試みであった。ここでは、2回のスタンドアップ・パドルボード（以下、サップ）運動実施のうち、初回の実践を報告する。実施したのは、2020年10月25日（日）、9：00から12：00であった。参加したのは、子供が8名、特別支援学校教諭や療育園保育士などのボランティア支援者7名であった。

当日は、ウォータースポーツ専門店MAGICISLANDの西川隆治氏と連携し開発した、障害者用サップを初めて使用した（写真-7）。加地（2021）は、重度・重複障害児を対象としたウォータースポーツ「サップ運動」の取り組みについて次の通り報告した。「国内外において、医療的ケアを要する重度・重複障害児が車椅子から降りて、ウォータースポーツを楽しめるように用具等を工夫した実践は報告例がない。用具開発のポイントは、①2台のサーフボードをコードで連結した前方は牽引用、後方は子供と介助者用とし



川でサップ運動を楽しむ子供（写真-7）

てクルージング可能とした点、②後方の座面にカヤックシートとジェルクッションを取り付け、座位の安定性向上を図った点、③後方の両サイドに自作した浮き具を取り付け、サーフボードの転覆防止を図った点であった。」

実施に当たっては、プール運動実施時と同様に、事前の参加基準チェックシートによる参加の可否判断、当日の子供への活動前後の①体調等の聞き取り、②非接触型体温計による検温、③パルスオキシメーターによるSpO₂と脈拍の測定を実施した。また、保護者、支援者、学生に対しても、事前・事後に①体調等の聞き取り、②非接触型体温計による検温を実施した。実際の活動については、4台のサップに支援者2名、子供2名が乗り、およそ30分間の活動を4回の交代制で実施した。子供に接する支援者は、複数が関わることの無いように1名が関わるよう制限した。また、手指や用具等のこまめな消毒を徹底しながら、全員が楽しく安全に活動できるように実施した。また、当日は待機時に屋外でのスクーターボード運動やトランポリン運動が同時に実施可能とした。

Ⅲ. 「はなまるキッズ」のアダプテッド・スポーツ実践の成果

オンライン運動の呼びかけ歌体操では、参加者は久しぶりに慣れ親しんでいる歌に合わせた運動を楽しみ、離れていても実際にモニターを介して応答することができた。参加した子供の中には、やや興奮気味で元気な笑顔を見せたり、声を出したりする場面も見られ、楽しいコミュニケーションの場となった。また、日頃の「はなまるキッズ」では、ボランティア支援者や学生と子供がペアになってスローベンチ椅子・ラジオ体操を実施しているが、オンライン運動では保護者と子供がペアになって実施した。参加した子供の中には、筆頭筆者がSNS上で公開しているスローベンチ椅子・ラジオ体操の動画を活用して自宅で運動を実施しているという家庭もあったが、初めて子供とペアになってスローラジオ体操を実施したという保護

者がほとんどであった。活動中は、筆頭筆者が示す動きに合わせて、肩関節を中心とした上肢の曲げ伸ばしや体幹運動をしたり、モニターに映る動きを楽しそうに注視したり、動きを説明する言葉に反応したりする等の様子が確認された。オンラインによる初めての試みであったが、子供と保護者で取り組める運動の時間となったとともに、子供と支援者が同じ空間を共有して運動に取り組むことができる楽しさを改めて体感することができた。

オンライン運動後の聞き取り調査の結果、表-2に示す通り、参加した保護者から「楽しかった」「笑顔になれた」等の回答を得た。参加したボランティア支援者からは表-3に示す通り、「参加者の顔を一度に見ることができて良い」「新しい生活様式での新しい取り組みが素敵だ」等の回答を得た。

プール運動では、可能な新型コロナウイルス感染症対策をしながら久しぶりの「対面」による活動再開となった。活動時には非日常の活動を通じ

表-2 保護者のコメント (オンライン運動)

すごくテンションがあがってしまいましたが、本人はすごく楽しそうでした。
なかなか毎月参加することが難しいですが、オンラインだと参加しやすいうちの子は楽しめていたと思う。
みんな元気そうなのがわかって良かった。
初めてでどんな感じになるのだろう？とと思っていましたが、みんなとお会い出来てとても楽しいひとときが過ごせました。
本当に顔を見ることができると自然に笑顔になり、嬉しいですね。元気になりました。

表-3 支援者のコメント (オンライン運動)

集まれないけど繋がっていることがよい。
参加者の顔が一度に見ることができて良い。
運動時のクッションによるモデルが良いアイデアだと思った。
新しい生活様式での新しい取り組みが素敵だと思います。
子供たちが可愛かった。テンションが上がった。
はじめの一步が踏み出せて、また、はなまるキッズの広がりが見えた気がします。

て、子供達の楽しそうな表情や自主的な身体の動きなどが確認された。直接対面し、ふれあいながらの運動・スポーツ活動ができることの大切さを改めて実感した。

体育館の活動では、コロナ禍の中で新型コロナウイルス感染症対策を講じたこれまでに経験したことのない実施であった。活動時には、参加した子供、保護者、支援者、学生で協力しながら実施したことで、多くの笑顔や楽しそうな声が確認され、子供達は必要な支援を受けながらダイナミックに運動・スポーツに取り組むことができた。

サップ運動では、子供達、支援者とも屋外での活動実施は初めての経験となったと共に、非日常の活動を実施することができた。屋外の活動は室内の活動と比較すると、新型コロナウイルス感染症対策として密集、密閉を避けた活動となりやすい点で安心して実施することができた。屋外である水上での非日常の活動が体験できたことで、子供達からは日頃は見ることのできない表情、身体の動き、発声などが確認された。

サップ運動では、参加した子供について、「これまで聞いたことのない大きな笑い声」「自分から手を伸ばして川の水に触れる動き」「自分から体を起こして喜ぶ様子」「やりたくて待ちきれない様子」等、日常では見ることのできなかつた様子が多く確認された。保護者からは表-4に示す通り、「道具を工夫すればスポーツはできることが分かった」「子供がすごく楽しそう。またやってほしい」等の回答を得た。また、障害者サップを体験して帰宅後の様子を聞くと、「よく食べた」

表-4 保護者のコメント (サップ運動)

道具を工夫すればスポーツはできることが分かった。
浮力を感じながら景色や風を楽しむことができ、非日常的な体験ができる。
子供がすごく楽しそう。またやってほしい。
心地よい揺れがリラックス効果につながっているように思う。
陸上とは違った体の使い方をしていて良い。
水が苦手でも楽しむことができる。

「よく水分を飲んだ」「早く寝た」「睡眠が深かった」等、食事や睡眠にも良い影響を与えていたとの回答を得た。

IV. 結論

本研究では、2020年度に「はなまるキッズ」が特別支援学校に在籍する重度・重複障害児を対象に、新型コロナウイルス感染症対策を講じて実施した新たな運動・スポーツ実践について報告し、参加している子供の「活動の場」としての有効性について検討した。研究の結果、表-5に示す通り参加する重度・重複障害児にとって主に「コミュニケーションの場」「非日常の活動の場」「ダイナミックな運動・スポーツの場」「快反応の表出の場」の4点について、子供の「活動の場」として有効であることが示唆された。

表-5 参加している子供の「活動の場」としての有効性

1.	対面・オンライン運動を通じた「コミュニケーションの場」
2.	三密を回避しやすい屋外・水上での「非日常の活動の場」
3.	必要な支援を受けた「ダイナミックな運動・スポーツの場」
4.	日頃は見られない表情、身体の動き、発声など「快反応の表出の場」

V. おわりに

「はなまるキッズ」の実践は、国内の優れた教育実践を表彰する「第48回博報賞特別支援教育部門」を受賞した(2017年)。また、広島県内において他の模範となる先導的な取り組みにより顕著な功績をあげたことが認められ、広島県知事より「広島県あいサポート運動企業・団体表彰」(2018年)された。そして、2021年12月には「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞した。この賞は、「障害者が生涯を通じて教育やスポーツ、文化などの様々な機会に親しみ、豊かな人生を送ることができるよう、障害者の生涯

を通じた多様な学習を支える活動を行う個人又は団体について、その活動内容が他の模範と認められるものに対し、その功労・功績をたたえ文部科学大臣が行う表彰である(文部科学省)。これまで、「はなまるキッズ」の実践を地道に続けたことにより、地元広島で評価されたことは、参加する子供、保護者、ボランティア支援者や学生にとって誠に光栄なことであったと共に、今後の活動継続に向けての意欲向上にもつながった。

今後も新型コロナウイルス感染症拡大の終息の見通しは持てない状況が続くと予想されるが、状況に応じて可能な実践・研究を継続すると共に、「はなまるキッズ」の取り組みが地域で開催するアダプテッド・スポーツ教室として、また、県内だけでなく県外でも活動が広がるよう地域貢献としての取り組みを充実させていくことを継続課題としたい。

謝辞

本研究にご協力をいただきました、「はなまるキッズ」に参加する子供、保護者、および支援者の方々に、心から感謝申し上げます。また、本研究の一部は、科学研究費助成事業(基盤研究(C)(課題番号20K02445))の助成を受けた研究課題であり、ここに感謝の意を表します。

注

文中に掲載している子供や支援者等の写真については、本人または保護者に使用の承諾を得ています。

引用文献

- 中央教育審議会(2005):「特別支援教育を推進するための在り方について(答申)」。
 文部科学省(2007):「特別支援教育の推進について(通知)」。19文科初第125号。
 岡田喜篤(2001):重症心身障害児の歴史,小児看護,24,1082-1089。
 名里晴美(2011):「重症心身障害児者」といわれ

- る人たちの暮らしと権利, 小児看護, 34, 547-552.
- 小沢浩, 新井洋 (2017): 特集・第58回日本小児神経学会学術集会, 序論: 現状と課題, 脳と発達, 49, 179-180.
- 田中真秀, 佐久間邦友 (2019): 日本における特別支援教育の制度変容, 川崎医療福祉学会誌, 28, 501-509.
- 加地信幸 (2021): 重度・重複障害児を対象としたアダプテッド・スポーツ実践に係る有効性の検討, アダプテッド・スポーツ科学, 19, 33-45.
- 矢部京之助 (1997): アダプテッド・スポーツの提言. ノーマライゼーション, 12, 17-19.
- Winnick, J. and Porretta D. (Eds.). (2016): Adapted Physical Education and Sport, 6E. Human Kinetics. Champaign, IL, 3-4.
- 加地信幸 (2018): HBG重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」の2017年度活動報告, 人間健康学研究, 1, 67-72
- 加地信幸 (2021): 重度・重複障害児を対象としたアダプテッド・スポーツ用具開発に係る有効性の検討ーウォータースポーツ「SUP (Stand Up Paddleboard)」の用具開発を通じてー, 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会, 口頭発表資料.

引用サイト

- 文部科学省 (2020): 学校基本調査「令和2年度結果の概要」
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00003.htm (2021.11.2閲覧)
- 文部科学省 (2013): 地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究報告書 (平成25年度)
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/suishin/1347306.htm, (2020.3.24閲覧)
- 一般社団法人日本スイミングクラブ協会 (2020): スイミングクラブにおける新型コロナウイルス感染拡大予防のためのガイドライン
http://www.sc-net.or.jp/pdf/COVID19_Guidelines.pdf (2020.6.13閲覧)
- 株式会社Rockin'Pool (2021): プールマスクマン
<https://mask.rockinpool.com/> (2021.11.14閲覧)
- 文部科学省 (2021), 令和3年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰について
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2021/mext_00792.html (2021.11.10閲覧)